

新・尾瀬ビジョン

～ 「あなた」と創る「みんな」の尾瀬 ～

2018（平成30）年9月10日

尾瀬国立公園協議会



尾瀬がめざす姿

「みんなに愛され続ける尾瀬」



--	--	--

行動理念

「みんなの尾瀬を
みんなで守り
みんなで楽しむ」

- ・ 尾瀬の普遍の価値を広く発信し、
尾瀬を愛する輪を広げましょう。
- ・ かけがえのない尾瀬をみんなで守り育て、
しっかりと次代に引き継いでいきましょう。
- ・ 自然を損なわない楽しみ方を考えながら、
みんなが訪れたくなる尾瀬にしましょう。

--	--	--

「新・尾瀬ビジョン」とは

「あなた」と創る「みんな」の尾瀬

尾瀬は「あなた」をはじめ「みんな」の財産です。そして、「あなた」がこれからも尾瀬の恩恵を受け続けるためには「みんな」の力が必要です。

「あなた」も「尾瀬がめざす姿」を実現させるため、「みんな」とともに力を合わせませんか？ その助けとなるように、「新・尾瀬ビジョン」（以下、新ビジョンという。）は、作られています。



【「みんな」って誰のこと？】

尾瀬の生きもの + すべての人 = みんな

「みんな」には、人はもちろん、尾瀬にいるすべての生きものも含まれます。また、すべての人には、「あなた」を始め、すでに尾瀬と関わっている人、まだ尾瀬との関わりに気付いていない人、これから尾瀬と関わっていく人が含まれています。

行政関係者を始め、これまで尾瀬を維持・管理していた人々も努力を続けますが、尾瀬がめざす姿を実現させるためには、これまで以上に個人や団体・企業などもそれぞれができることを考え、みんなで協力していくことが不可欠です。

【新ビジョンで考える範囲は？】

尾瀬国立公園 + 周辺地域 = 尾瀬

新ビジョンでは、「尾瀬」を尾瀬国立公園とそこを取り巻く広がり一帯と考えています。一方で、自然を守るための普及啓発や魅力の発信などは、地域を限定せず「尾瀬」以外の地域でも進めていきます。

【「めざす姿」ってどういうこと？】

「尾瀬がめざす姿」は、あなたや次代を担う子どもたちにとって、20年後の尾瀬がどうあってほしいかということを考えて書かれています。

先人たちが今まで守ってきた「みんな」の財産である尾瀬を「あなた」も「みんな」の一人として引き継ぎ、「めざす姿」の実現に向けて取り組んでいきましょう。

【新ビジョンに書かれていることは？】

○新ビジョンには次のことがまとめられています（該当ページ）。

- 尾瀬を取り巻く自然的・社会的環境の変化 (3～4 P)
- 活かしたい尾瀬の強み (5～6 P)
- 尾瀬がめざす姿 (8 P)
- めざす姿を実現するために意識する「行動理念」 (8 P)
- 尾瀬の「今後の方向性・必要な取組」 (9～14 P)

○新ビジョンの最後に次のことをまとめています。

- 前回の「尾瀬ビジョン」の振り返り
- 新ビジョンをつくる際に集められた「みんな」の意見集
- 新ビジョンと具体的な取組・行政計画との関係

【新ビジョンの見直しは？】

自然的・社会的環境は絶えず変化しているため、新ビジョンに書かれていることは、こうした変化を踏まえながら見直していきます。

「尾瀬」と前回の「尾瀬ビジョン」

美しい景観とともに貴重な生態系を有する「自然の宝庫」尾瀬は、過去において数多くの開発の波にさらされましたが、そのたびに、先人たちの懸命な努力により守られてきました。

2006（平成18）年11月30日、「尾瀬」の現況や課題を受け、多様な主体からなる「尾瀬の保護と利用のあり方検討会」において、今後の尾瀬のあり方を示す「尾瀬ビジョン」がつくられました。

このビジョンで示された取組の結果、2007（平成19）年8月30日に「尾瀬国立公園」は日光国立公園から分離・独立しました。

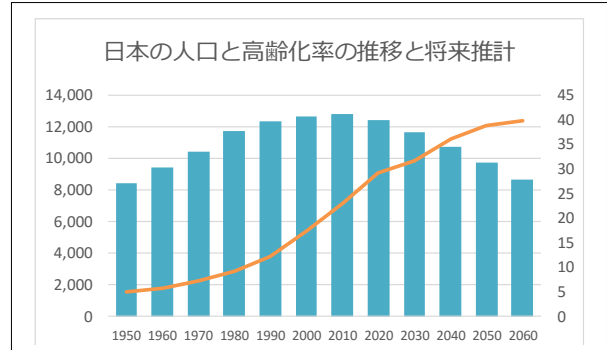
その後、10年が経過し、尾瀬を取り巻く自然的・社会的環境も大きく変化していることから、様々な変化を踏まえ、将来を見据えた「新ビジョン」として改定を行いました。

尾瀬を取り巻く自然的・社会的環境の主な変化

(1) 少子高齢化・人口減少による影響

本格的な人口減少社会の到来により、2050年には日本の人口は1億人を割り込むと予測され、高齢者の割合は、2050年には40%弱まで上昇する見込みです*1出典。

また、都市への人口集中により、尾瀬の関係自治体においても少子高齢化・人口減少が進んでおり、過疎化や産業の衰退が懸念されています。

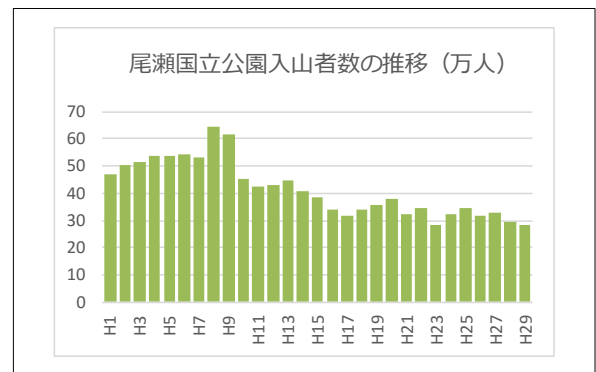


(2) ライフスタイルの変化とレジャーの多様化

価値観やライフスタイルの変化により旅行形態は団体から個人に変化し、インターネットによって情報の入手が容易になったことで、個人の好みや興味・関心に合わせた取組が求められるなど観光地間の競争は厳しくなっています。

都市化とデジタル化が進む社会の中で自然と触れ合う時間が減少し、さらにレジャーも多様化したことで「山離れ」も進んでいます。

このような変化は、尾瀬国立公園の入山者数減少の一つの要因と考えられます。入山者数は、1996(平成8)年の約65万人をピークに減少し、2016(平成28)年度には震災以降初めて30万人を下回り、2017(平成29)年度も28万人となっています*2出典。また、日帰り利用の増加や年齢層の高齢化が指摘されています。



(3) 外国人旅行者の増加

日本は、観光業を基幹産業として位置付けており、2020年に訪日外国人旅行者を4,000万人にすることを目標としています。また、環境省も国立公園における訪日外国人旅行者を2020年までに2015年の2倍以上の1,000万人に増やすことを目標にしています*3出典。実際に訪日外国人は、2007年は約835万人、2017年は約2,869万人と、10年間で約3.4倍となっています。*4出典。

こうした流れから、尾瀬においても外国人旅行者数は増えつつあり、今後も増加が予想されます。

(4) 気候変動による自然生態系への影響

人間の活動によって温室効果ガスなどが増えたことにより、日本では気温の上昇、降雨日の減少と大雨の増加、降雪量の減少といった気候変動が観測されています。その結果、生物の生息環境が変化することで種の減少や分布域の変化といった自然生態系への影響が危惧されています。

尾瀬は気温が低く湿度が高い地域であるため、枯れた植物が分解されず泥炭として積もった高層湿原が広がっています。多雪・寒冷な環境下で成立した生態系は、気候変動の影響を大きく受けると考えられるため、湿原の乾燥化や植物の分布域の縮小、種組成の変化などが危惧されています。また、大雨に伴う土砂の流出により、登山道の荒廃やアクセスルートの遮断につながるおそれもあります。

(5) ニホンジカによる影響

日本ではニホンジカの生息数が急速に増加し、自然景観や植生の消失、表土の流出、希少種の減少などが全国的に問題となっています。生息数が増加した理由は、雪の降る量が減少したことに加え、耕作放棄地の増加、狩猟者の減少といった人間の営みの変化も大きく影響していると言われています*5 出典。

尾瀬はニホンジカの影響を受けずに成立した生態系であると考えられていますが、1990年代中頃から生息が確認され、植生の食害や掘り起こしによる湿原の裸地化が問題になりました。関係機関による捕獲などが進められていますが、影響は継続して認められており、このまま影響を受け続けた場合、尾瀬本来の生態系・植生の消失が懸念され、国立公園としての資質や観光資源としての魅力の低下にもつながりかねません。



高山植物を採食するニホンジカ



裸地化した湿原

(6) 財政状況などの悪化

少子高齢化や人口減少等の社会経済状況の変化により、国や自治体の財政状況は厳しくなっています。施設の整備に充てられる事業費も減少しており、例えば環境省ではその事業費は2001（平成13）年度をピークに減少しており、2017（平成29）年度はピーク時の約半分となっています。現状のままでは、今後も地方自治体を含む行政機関の事業費は減少していくと予想されます。

尾瀬の植生を守るために整備されている木道は全長約 65km あり、全体で毎年数億円の整備費が必要ですが、現在の整備レベルを維持するための十分な財源の確保が困難となっています。

また、尾瀬国立公園の入山者数の減少に伴い、尾瀬で働く人々の経営状況はかつてと比べて厳しいものになっています。特に、遭難救助や登山道整備の現場で重要な役割を果たしている山小屋などの宿泊業は厳しい経営を強いられています。

活かしたい尾瀬の強み

(1) 歴史・伝統・文化の魅力

尾瀬には、長い歴史の中で息づいてきた伝統・文化が多くあります。

魚沼市には、平安時代に湯之谷村で最期をとげたと言われる尾瀬中納言三郎の立像があり、昔から尾瀬との関わりがあったことがうかがえます。

福島県檜枝岐村と群馬県片品村は、尾瀬を挟んで旅人が行き交う会津沼田街道の途中にあり、江戸時代には米や酒などの物資を運ぶ交易路となっていました。また、戊辰戦争の際に会津軍が築いた土塁跡が大江湿原に今も残っており、片品村戸倉には、会津軍と新政府軍が交戦した記録が残されています。



馬で荷物を運ぶ (1957(昭和 32)年)

この他にも、尾瀬と結びついた歴史・伝統・文化に基づくストーリー(独自の神話、地名の由来など)が数多くあり、これらは今後磨き上げて発信していきたい尾瀬の魅力です。

(2) 尾瀬が持つ普遍の価値

さらに、雄大で豊かな自然が残る尾瀬は、見る人に美しさや心地よさ、くつろぎを感じさせてくれるなど、「みんな」にとって価値のあるものです。

尾瀬は、寒冷な気温と豊かな降水量によって、変化に富んだ山岳地形がかたちづくられ、川や森、湿原など豊かな自然が見られます。

8 千年という長い年月をかけてつくられた湿原の泥炭には、過去の気候変動や浅間山や榛名山、遠くは九州の火山活動が保存記録されているなど、自然の博物館としても貴重な存在です。このように、自然的・文化的に特に価値が高いものとして特別天然記念物にも指定されています。

2005(平成 17)年には、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約(ラムサール条約)」に登録されるなど、様々な生きものが織りなす生態系も価値あるものです。

(3) 自然保護の原点

尾瀬はこれまで、度重なる開発の波にさらされてきました。

1903（明治36）年、尾瀬にダムを建設する計画が初めて発表されてから、水力発電を進める国策と尾瀬の保存を求める考えの間で、長期にわたる議論がありました。1948（昭和23）年に尾瀬ヶ原全体をダム化する計画が持ち上がると、1949（昭和24）年には学者・文化人・登山家たちが、「尾瀬保存期成同盟」（今の「公益財団法人日本自然保護協会」）を結成し、日本の自然保護運動の先駆けとなりました。

尾瀬周辺の道路についても、1940（昭和15）年に日光国立公園利用計画に会津沼田街道の車道化が位置付けられてから議論が続けられました。計画変更を経て、福島・群馬の両県による工事が進められましたが、全国的に自然保護の世論が高まり、尾瀬では1971（昭和46）年に平野長靖氏が環境庁（当時）長官に訴え、また「尾瀬の自然を守る会」が結成されるなどして道路計画の中止につながりました。



工事が中止になった道路（石清水付近）

このように、今でも美しい尾瀬の魅力を私たちが感じることは、先人たちの想いと取組があったからです。

(4) ごみ持ち帰り運動発祥の地

1972（昭和47）年に、地元団体、山小屋組合などの関係機関、登山者有志や国立公園協会の提案によって環境省・地元3県（福島・群馬・新潟）・関係機関による「ごみ持ち帰り運動」が始まり、30年以上もごみ持ち帰りの呼びかけが地道に行われています。



企業と連携したごみ持ち帰りの呼びかけ

尾瀬に関わる人々の協力と努力によって、一時期はごみであふれていた尾瀬も、今は美しい自然を保っています。

(5) 多様な主体が参加できる「仕組み」の存在

国立公園では、優れた自然風景を後世まで残していくこと（保護）と、様々な人がその素晴らしさを楽しむこと（適正な利用）のバランスをとっていくことが必要です。そのためには地域住民や利用者、土地所有者、行政機関、自然保護団体などの多様な主体が一体となって取り組む「仕組み」が重要です。

尾瀬サミット2018の写真

尾瀬では、2008（平成20）年から「尾瀬国立公園協議会」が開催され、全国に先駆けて多様な主体による尾瀬国立公園の管理運営が進められてきました。さらに、1995（平成7）年から、三県知事が一堂に会し尾瀬のあらゆることについて話し合う「尾瀬サミット」が毎年開催されるなど、尾瀬では多様な主体が参加できる「仕組み」が先進的に作られています。これほど多くの関係者が集まって地域のことを話し合う事例は日本にはほとんどありません。

（6）一級 of 自然の中で歩き、学び、宿泊できる特別感

国立公園では、保護と適正な利用のバランスをとるために一定の行為が規制されており、規制の強い順に特別保護地区、特別地域、普通地域に区分されています。

尾瀬国立公園の中心部は、特別保護地区であり、特に優れた自然風景や生態系を有している場所です。それでありながら歩道やサービスの充実した山小屋が整備されていることで、優れた自然の中を歩くだけでなく、環境学習のフィールドとして利用できています。さらに、宿泊することで朝もや、白い虹、夕焼け、星空、ホタルが飛ぶ情景など、宿泊した者だけが体験できる特別な魅力を尾瀬は持っています。



尾瀬での環境学習



白い虹

（7）受け入れることができる利用者層の幅広さ

尾瀬は、2千メートル級の山々で登山を楽しめる場所でありながら、国立公園の中心部は木道が整備されており、様々な世代が一緒に楽しめる場所になっています。また、首都圏に比較的近く複数の登山口やルートが存在するだけでなく、歴史・伝統・文化の魅力も有していることで、幅広い利用者層を受け入れることができます。特徴であり、利用者はニーズ、体力に合わせて多様な楽しみ方ができます。



親子での尾瀬散策



地域住民と企業などが協力したシカ柵設置

尾瀬がめざす姿

みんなの財産である尾瀬をこれからも守り続けていくため、活かしたい尾瀬の強みを高めながら、3つの視点を大切に「みんなに愛され続ける尾瀬」を目指しましょう。

1. 「生きもの」の視点

尾瀬本来の生きものがあるのままだに生きている

2. 「利用者」の視点

いつ来ても楽しく誰もがわくわくできる

3. 「地域」の視点

地域の人々が誇りを持っていきいきできる

行動理念

「尾瀬のめざす姿」を実現するため、次の行動理念に基づき行動しましょう。この考えは、前回の尾瀬ビジョンから大切に引き継がれてきたものです。

「みんなの尾瀬を みんなで守り みんなで楽しむ」

1. みんなの尾瀬

尾瀬の普遍の価値を広く発信し、尾瀬を愛する輪を広げていきましょう。

2. みんなで守る

かけがえのない尾瀬をみんなで守り育て、しっかりと次代に引き継いでいきましょう。

3. みんなで楽しむ

自然を損なわない楽しみ方を考えながら、みんなが訪れたい尾瀬にしましょう。

■今後の方向性 ・ 必要な取組

1. 「みんなの尾瀬」について

尾瀬の普遍の価値を広く発信し、尾瀬を愛する輪を広げていきましょう。

視点① 愛される尾瀬づくり

■尾瀬のファンづくり

「みんな」の輪を広げていくため、より多くの人々が尾瀬に愛着を持ってくれるようにします。

- ・ 新たな利用者の獲得
- ・ 利用者満足度の向上によるリピーターの獲得
- ・ 外国人も利用しやすい尾瀬のあり方の検討
- ・ 障がいのある方をはじめ、様々な人々のニーズへの対応

■尾瀬で学ぶ機会の拡大

幅広い利用者層を受け入れられるフィールドとしての尾瀬の強みを活かして、子どもだけでなく、あらゆる世代が尾瀬で学ぶ機会をつくります。

- ・ 学校団体による尾瀬での環境教育の推進
- ・ 企業の研修など、尾瀬を活用する新たな機会の拡大 など

視点② モデルとなる尾瀬づくり

■先進的な取組の推進

これからも、尾瀬が自然との共生を目指すトップランナーであり、全国のモデルであり続けられるような取組を進めます。

- ・ 地球環境に配慮した取組の推進
- ・ 全国的な共通課題に対する解決策の模索・他地域の成功事例の収集や応用 など

視点③ 尾瀬を育てる仕組みづくり

■多様な主体の参加と連携促進

利用者や地域住民をはじめ様々な人々が一丸となることで、各取組がより効果的・効率的に実施できるようにします。

- ・ 利用者や地域住民が管理運営に関われる機会の拡大
- ・ 地域間が連携した一体的で広域的な取組の推進
- ・ すでにある仕組みを活用した尾瀬に関わる人々のコミュニケーションの推進
- ・ 利用者や企業などのサポーターによるボランティアとしての活動への支援
- ・ 山小屋やビジターセンターなど現場からの声を対策に活かす仕組みの構築

■担い手の育成

尾瀬の保護と適正な利用の主体となる担い手を育成します。

- ・尾瀬を愛する次代の獲得・育成
- ・研修などによる知識・技術を学ぶ機会の拡大 など

■資金的サポートの呼びかけ

これからも尾瀬を育てていくためには、多くの人からの資金的サポートが不可欠であるため、広くサポートを呼びかけます。

- ・尾瀬の維持管理に必要な資金の現状把握
- ・利用者負担のあり方の検討
- ・活動への寄付などの呼びかけ など

視点④ 情報の効果的・効率的な発信

■認知度の向上

多様な媒体を活用し、尾瀬の価値や魅力を国内外に発信することで、「誰もが知る尾瀬」にします。

- ・テレビや雑誌などメディアとの連携による情報の発信
- ・SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)などのインターネットの活用
- ・情報を届けたいターゲットに応じた発信方法や発信内容の明確化
- ・歴史・伝統・文化を含めた尾瀬一帯にある多様な魅力の総合的な発信 など

■情報の共有

利用者や地域住民の尾瀬に対する関心を高め理解を得るため、尾瀬の現状や取組、その効果などについて情報をオープンにしていきます。

- ・統一的で分かりやすい情報の発信方法の検討
- ・ウェブサイトなどでの情報公開の推進 など

視点⑤ 尾瀬の現状把握

■基本情報の収集

尾瀬の現状を調査し分析することで、今の尾瀬の姿を的確に把握し、取組に反映させます。

- ・尾瀬の強みと弱みの分析
- ・利用者の利用実態に関する情報の収集
- ・尾瀬を取り巻く状況の変化の把握 など

■今後の方向性 ・ 必要な取組

2. 「みんなで守る」について

かけがえのない尾瀬をみんなで守り育て、しっかりと次代に引き継いでいきましょう。

視点① 自然豊かな尾瀬づくり

■これまでの取組の継承

先人たちの想いと取組によって築かれてきた「自然保護運動の原点」としての尾瀬を次代に引き継いでいきます。

- ・ これまでの取組の継続と改善
- ・ 尾瀬における自然保護の歴史の継承 など

■貴重な自然環境の保護

尾瀬本来の魅力である豊かな自然環境を次代に伝えていくため、これまで守られてきた原生的な自然環境をこれからも守っていきます。

- ・ 尾瀬の自然の特異性や価値への理解の促進
- ・ 人の活動が与える自然への負荷の最小限化
- ・ 乾燥化や樹林化から湿地生態系や景観を守るための検討 など

■植生の荒廃対策

尾瀬の自然環境を健全な状態で残していくため、新たな荒廃の防止と植生の回復に取り組みます。

- ・ 至仏山・会津駒ヶ岳を始めとする山岳地帯や尾瀬ヶ原・尾瀬沼周辺における荒廃対策の実施
- ・ ニッコウキスゲなど尾瀬を代表する植生の回復にむけた取組の実施 など

■外来植物対策

もともと尾瀬になかった外来植物は、尾瀬本来の生態系を脅かす存在であることから、積極的な防除の実施及び新たな侵入と分布の拡大防止に取り組みます。

- ・ 侵入状況の把握と効果的な防除方法の検討
- ・ 地域住民や企業と連携した防除活動の実施 など

視点② 歴史・伝統・文化が息づく尾瀬づくり

■歴史・伝統・文化の保全

地域に息づいた歴史・伝統・文化は、地域に対する愛着を深める大切な資源であるため、その価値を再認識しながら、しっかりと後世に残受け継いでいきます。

- ・ 歴史・伝統・文化に関する地域の宝の再認識、掘り起こし、活用 など

■新しい歴史・伝統・文化の創造

今を生きる私たちも、歴史・伝統・文化を創造していることを自覚し、誇りと責任を持って行動していきます。

- ・それぞれの地域が持つ「強み」を活かした伝統・文化の深化、発信 など

視点③ 野生動物との^{あつれき}軋轢の解消

■ニホンジカによる被害の低減

このまま被害が継続すると、尾瀬ヶ原・尾瀬沼周辺などの貴重な植生に回復不可能な影響を与える可能性があるため、積極的な管理を行います。

- ・科学的知見に基づく総合的なシカ管理方針の作成
- ・優先して守りたいエリアマップの作成
- ・効果的な防除対策や捕獲手法の確立
- ・効果検証のためのモニタリング手法の確立
- ・広域連携による越冬地での捕獲の強化
- ・捕獲したニホンジカの有効活用

など

■ツキノワグマとの共存

ツキノワグマの生息地の中で、ツキノワグマと人の共存を図るための取組を実施していきます。

- ・ツキノワグマの生態や対応方法についての利用者への普及啓発
- ・巡視やクマ鐘の設置などの遭遇事故防止対策 など

■新たな獣害への対応

周辺地域においてイノシシやニホンザルの生息域の拡大が指摘されていることから、新たな問題が尾瀬で発生しないように被害の拡大防止に努めます。

- ・研究者や猟友会からの動向の確認と関係者間の情報共有 など

視点④ 科学的知見に基づく保全

■調査研究の促進

それぞれの対策をより効果的に進めるため、調査研究から得られた知見が保全対策に反映される仕組みをつくります。

- ・保全活動の計画や実施に必要な科学的知見の収集・活用
- ・研究者と公園管理者の情報共有や意見交換の推進
- ・継続可能な自然環境モニタリングシステムの構築 など

■今後の方向性 ・ 必要な取組

3. 「みんなで楽しむ」について

自然を損なわない楽しみ方を考えながら、みんなが訪れたい尾瀬にしましょう。

視点① 魅力あふれる尾瀬づくり

■尾瀬の魅力向上

何度も訪れたい尾瀬をめざすため、地域の宝（地域資源）を再発見し、その魅力を磨き上げていきます。

- ・地域の宝について学び再発見する機会の拡大
- ・新たな視点による地域の宝の発掘 など

視点② 幅広い楽しみ方の検討

■多様な利用方法の検討

いつ来ても楽しい尾瀬をめざすため、季節を通じた利用のあり方やルールづくりを検討しながら、利用者に多様な楽しみ方を提案します。

- ・新たな尾瀬の楽しみ方の検討・意見交換
- ・地域特性に応じた残雪期や冬期利用のあり方の検討 など

■エコツーリズムの促進

認定ガイド利用などを通じてエコツーリズムを促進することで、尾瀬の保護と地域の持続性の両立を図ります。

- ・質の高い認定ガイドなどエコツーリズムに関わる事業者の育成
- ・地域の宝を活かした尾瀬ならではの旅行商品や体験プログラムの作成
- ・認定ガイド利用を促進する仕組みの構築
- ・旅行エージェント等と連携したエコツーリズムの促進 など

■地域における利用の役割分担

尾瀬の核心地や周辺地域において、地域性と自然の状態などを考慮しながら、その場所にふさわしい利用のあり方を考えます。

- ・地域特性等に応じた、対象とする利用者層や利用スタイルの提案
- ・利用者層や利用スタイルに応じた利用施設のあり方の検討 など

■滞在型・周遊型利用の促進

地域ごとの資源につながりをもたせ、点ではなく線的・面的に考えていくことで、地域ごとの魅力をより広い視点でゆっくり楽しんでもらえるようにします。

- ・尾瀬を楽しむモデルコースの提案
- ・朝夕、星空など泊まらないと体験できない魅力の発信
- ・季節や場所ごとの魅力の発信による利用の分散化 など

視点③ 楽しむための土台づくり

■安全対策

年齢・体力といった利用者特性が多様化する中で、より安心・安全に尾瀬を楽しめるようにします。

- ・事故や遭難を防止するための危険箇所の整備や利用者への普及啓発
- ・事故や遭難情報の収集と共有
- ・救助体制の整備や今後のあり方の検討 など

■施設の整備

利用者が安全で快適に尾瀬を楽しめるように、必要な施設や登山道の整備を進めます。

- ・荒れた登山道や標識類などの整備
- ・長寿命化などトータルコスト低減の検討・実施
- ・道の駅など既存施設の情報発信拠点としての有効活用 など

■ルール・マナーの検討・普及啓発

自然への負荷を最小限に抑え、みんなが尾瀬を安全で快適に利用できるように必要なルール・マナーを普及啓発します。

- ・携帯電話などの通信端末やドローン、冬期利用についてのルールの検討
- ・尾瀬を楽しむ上でのルール・マナーの普及啓発
- ・入山口やインターネットを活用した入山前後における普及啓発 など

■望ましい交通アクセスの検討

自然環境に配慮しながら、尾瀬にふさわしい交通アクセスを検討します。

- ・滞在型・周遊型利用の促進を意識したアクセスのあり方の検討
- ・利用者が少ない地域へのアクセスの向上
- ・尾瀬と他の地域を結ぶアクセスの連携強化
- ・分かりやすく利用しやすい案内・誘導 など

前回の「尾瀬ビジョン」の振り返り

前回のビジョンで示された内容について、今までの取組を振り返ります

取り組んできたこと

1. 国立公園区域の見直しについて

- ・2007（平成 19）年 8 月 30 日に日光国立公園から分離・独立し、会津駒ヶ岳、田代山、帝釈山などが加わって新たに尾瀬国立公園となりました。

2. 保護について

- ・研究者などによって、長年各分野の調査研究が進められています。
- ・20 年ぶりに第 4 次尾瀬総合学術調査が始まりました（2017（平成 29）年～）。
- ・ニホンジカ対策を目的とした尾瀬国立公園シカ対策協議会が組織され、2000（平成 12）年に策定、2009（平成 21）年に改定された「尾瀬国立公園シカ管理方針」に基づき、関係機関が連携しながら調査研究や捕獲などの対策が進められています（2001（平成 13）年～）。
- ・ツキノワグマとの共存を目指した「ツキノワグマ対策マニュアル」がつくられ、事故の防止対策や利用者への普及啓発が行われています（2009（平成 21）年～）。
- ・関係機関やボランティアが連携し、過去のごみ問題や荒廃した植生の回復対策が進められるなど、尾瀬を守るための活動が続けられています。

3. 利用について

- ・鳩待峠からの利用分散を目的に大清水～一ノ瀬間において低公害車の営業運行が始まりました（2015（平成 27）年～）。
- ・訪日外国人旅行者の増加を踏まえ、標識のサイン統一化や設置する際のガイドラインがつけられました（2016（平成 28）年～）。
- ・静かな入山口を目指し鳩待峠駐車場の再整備が行われました（2016（平成 28）年～）。
- ・関係自治体などにおいて、尾瀬をフィールドとした環境教育が行われ、多くの子どもたちが尾瀬で学んでいます。
- ・尾瀬ガイド協会が設立され、認定ガイド付きの環境学習やエコツアーリズムが推進されています（2008（平成 20）年～）。

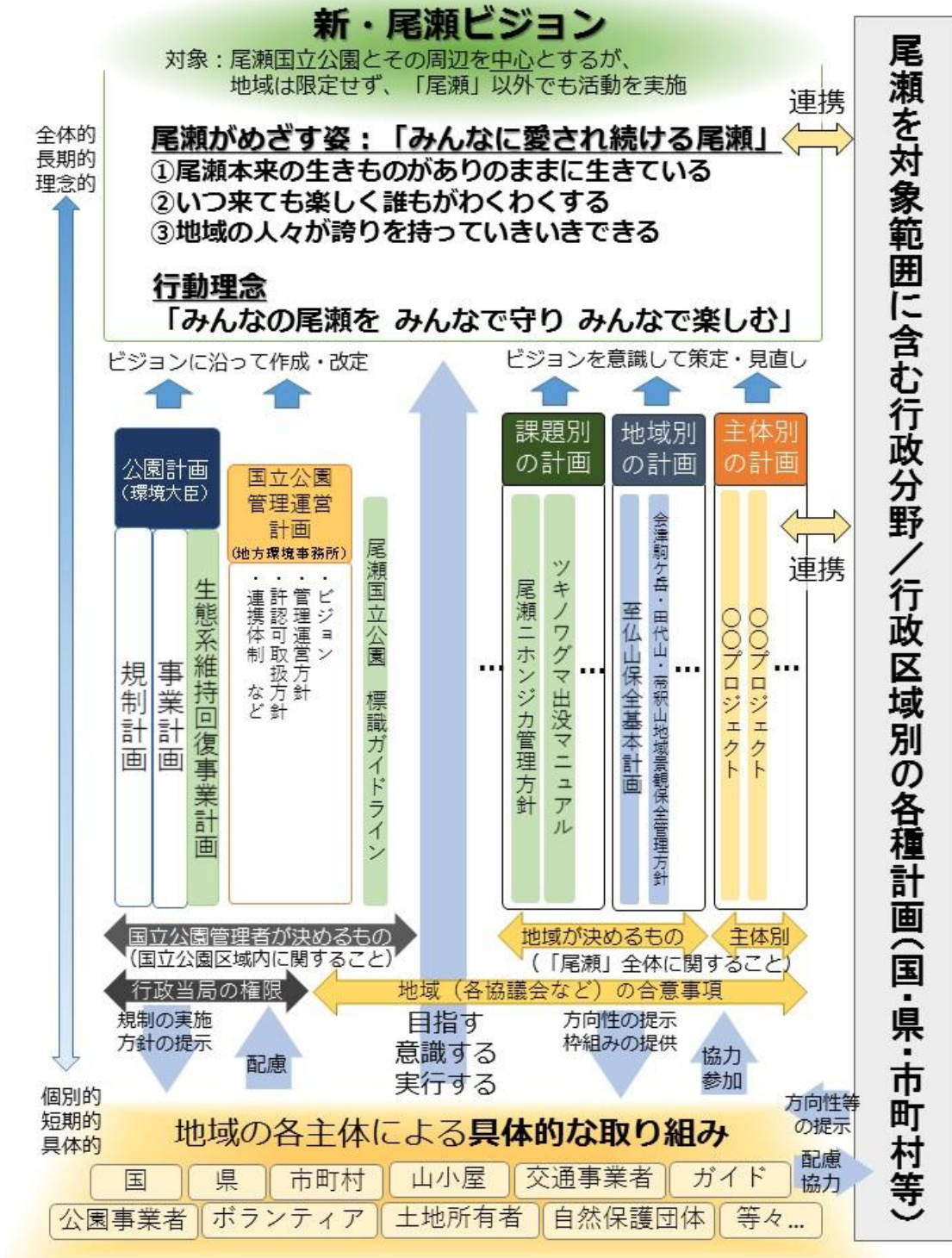
4. 管理運営体制について

- ・尾瀬国立公園協議会が設置され、多様な主体が参加して尾瀬国立公園の管理運営が行われています（2008（平成20）年～）。
- ・尾瀬サミットで、関係機関のトップが集まって尾瀬のあらゆることが話し合われています（1992（平成4）年～）。
- ・救助体制に基づき山小屋やビジターセンターが遭難救助の重要な役割を担っています。また、尾瀬国立公園の各地区にAEDを設置するなど、利用者の安全確保のために取組が進められています。
- ・登山道の整備に必要な資金的サポートを受ける取組が始まりました（2017（平成29）年～）。

これから必要なこと

- ・必要に応じて尾瀬国立公園の公園計画や管理計画の見直しを行います。
- ・尾瀬をより良くするためには何を調べる必要があるのかを明確にし、その成果を公園管理にどのように活かしていくのかを考えることが必要です。
- ・ニホンジカの影響は低減できておらず、抜本的な対策が求められています。
- ・ツキノワグマの目撃回数が増加しており、共存に向けた取組が求められています。
- ・イノシシやサル分布の拡大が指摘されており、尾瀬に影響が及ばないように注視していく必要があります。
- ・尾瀬を守るための活動については、各対策の目標を明確にしなが、取組を進めていくことが必要です。
- ・さらに利用の分散を進めるため、尾瀬が持つ多様な魅力や滞在型・周遊型の利用を推進する必要があります。
- ・訪日外国人旅行者や軽装での入山者の増加を踏まえ、インターネットや入山口での入山前の情報発信の必要性が高まっています。
- ・エコツーリズムの推進はもちろん、認定ガイドの高齢化や訪日外国人旅行者に対応できる新たな担い手の養成が求められています。
- ・既存の仕組みを見直しなが、関係機関だけでなく、利用者や地域の担い手など様々な人が、活発な意見交換をできる機会をつくる必要があります。
- ・これからも尾瀬を守り続けるため、利用者などからのより一層の資金的・人的サポートが求められています。

新ビジョンと具体的な取組・行政計画との関係



【出典・参考文献】

* 1 :

「平成 27 年版高齢社会白書」 P5
(内閣府)

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/zenbun/27pdf_index.html

* 2 :

「平成 29 年度尾瀬国立公園入山者数について」
(環境省関東地方環境事務所 報道発表資料)

http://kanto.env.go.jp/pre_2018/29_1.html

* 3 :

「平成 29 年版環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書」 P137
(環境省)

<http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/>

* 4 :

日本政府観光局 (JNTO) 訪日外客数

* 5 :

「全国のニホンジカ及びイノシシの個体数推定等の結果について (平成 27 年度)」

(環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護管理室 報道発表資料)

<http://www.env.go.jp/press/102196.html>

* 6 :

「いま、獲らなければならない理由 (わけ) - 共に生きるために - 」
(環境省)

http://www.env.go.jp/nature/choju/docs/docs5/imatora_fin.pdf